

「笑顔が広がる ふれあいの場」

いつも やさしさと愛情 感謝の心



吉野川医療センター敷地内公園
「川面に映る桜」

皆さんお元気ですか

暖かな春の日差しがなによりうれしい季節になりました。

さて、新年度が始まり、環境が変わる方も多いと思いますが、新しいことにチャレンジする季節でもあります。前向きな気持ちで充実した日々を過ごし、幸せな瞬間を大切にしてください。素敵な出会いや成長がありますように。



雅やかな宮中、女の戦い！
紫式部、清少納言をいきおろす！

『枕草子』を書いた清少納言と、『源氏物語』を書いた紫式部と、ともに一条天皇の後宮にいた才女。この頃の後宮は、たんなる性生活の場ではなく、文学を生むサロンであり、才女がひしめいていた。男女間の恋愛についてもおもしろかった。しかし、貧窮に苦しむ庶民とはほど遠い、いい気なものだった。

十一世紀に入った長保二年（一〇〇〇）、藤原氏は自系の女を二人、一条天皇の後宮に入れていた。

一人は定子（ていし）で皇后、一人は彰子（しょうし）で中宮である。

この二人にはそれぞれ才女が従い、その才女たちはめきめき才能を表した。男性貴族でさえ感嘆する才女たちの文才は、いきおい彼女たちの住む部屋を大サロン化し、つぎつぎと人が訪れた。

中でも、皇后定子に従う清少納言と、中宮彰子に従う紫式部の両サロンは、訪問客がひきもきらなかつた二人とも、夫をなくした未亡人だったが、文才はともに群を抜いていた。

しかし、性格はまったく対照的だった。

人々の見たところ、清少納言は、「かなり強気だ」といわれたし、紫式部は、「とても控えめだ」といわれた。また、「清少納言殿は、上流生活を賛美し、庶民を卑（いや）しんでいる」といわれ、「紫式部殿は、下層の人々にも温かい目を注いでいる」といわれた。

後宮は女性の世界だ。一条天皇の後宮が華麗な平安文学を生み出す舞台になったのは、文才の競いあいももちろんあったが、それ以上に、女性特有の激しい嫉妬心でもあったように思われる。

嫉妬による憎しみの情もまた、才能をさらに磨く研磨機の役を果たすのだ。

清少納言と紫式部は、対極に立つ女性としていろいろ対比されるが、実際には、式部が後宮に勤めた頃は、皇后定子が死んで五、六年たった。

清少納言もこのとき宮仕えを辞したらしいから、二人が才能を争った機会はなかったというのが事実だろう。

が、あれだけ控えめで他人の悪口などこれっぽちも言わない、紫式部が、清少納言についてこう書いている。

「清少納言は、実に高慢ちきでいやな女だ。りこうぶって、才能を自慢しているが、まだまだ勉強が

足りない。あ

あいうふう

目立つことばかり考えている人間は、必ず哀れな末路をたどるにちがいない

……」（『紫式部日記』）

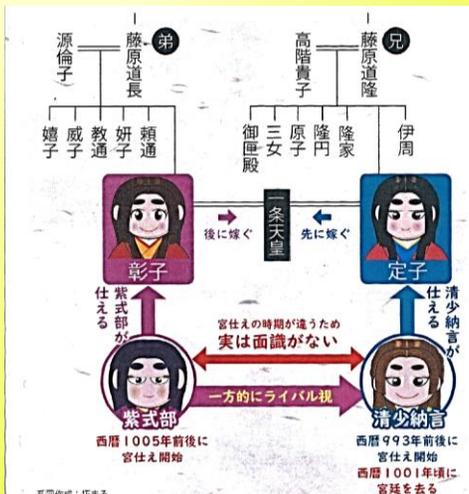
宮に入った頃、まだまだ清少納言のうわさが高かったのだろう。持ち前のつつましさは破れて、式部もつい反発したのだ。彼女もまた女であった。

和歌をかぞえるの「一首・二首」をかぞえるのはなぜ？

俳句は一句二句と「句」でかぞえますが、和歌（短歌）は一歌二歌とはかぞえないで、一首二首というように「首」でかぞえます。首はいうまでもなく頭部のこと、首という字は目と毛髪をかたどった象形文字です。その首がどうして和歌（短歌）をかぞえる助数詞になったのでしょうか。

一首・二首といつかぞえ方はもとは中国でのかぞえ方でした。中国では詩をかぞえるとき、詩一首・詩二首というように、「首」を用いました。

そのわけははっきりしませんが、「首」という言葉には頭部という意味のほかに、おさ（長）、かなめ、物事のしめくりという意味があり、詩はあらゆる作品のなかで、もっとも重要なものとして尊ばれました。おそろくそうしたことから中国では詩を「首」でかぞえるようになったようです。そしてそれになら、日本でも和歌（短歌）を一首・二首と「首」でかぞえるようになったよう、万葉の時代からすでに歌は「首」でかぞえていました。



（話のネタ集より）